語学教育におけるプロジェクト学習の試み
－知識獲得型学習から複合的能力育成学習へ－

グローバル教育センター　　八　木　真奈美

要旨

本学では，ディプロマ・ポリシーとして，「グローバル化の著しい現代社会における地域社会の中で中核的役割を担う幅広い人材を育成すること」をあげており，その達成のため，「駿大社会人基礎力」を掲げ，専門的知識・技能の活用力を身につけることを目標としている。しかし，留学生は言語や文化の違いに加え，入学の経緯や将来の希望もさまざまであり，彼らにとって望ましい「社会人」や「役割を担う人材」像は，日本人学生に求められるものとは異なると考えられる。また，留学生にとって日本語を学ぶ上で大切なことは，日本語の知識や技能の習得と同時に，自己実現のために，いかに日本社会や日本語と関わるのかをしっかりと認識した上で学習を進めることであろう。そのためには，メタ認知的に自分の人生や学習を振り返る力が不可欠となる。このような自分を振り返る「内省性(Reflectiveness)」を能力概念の核心においているのがOECDのキー・コンピテンシーである。キー・コンピテンシーは，OECD主導のもと，1997年から行われた「能力の定義と選択」(Definition & Selection of Competencies) プロジェクトにおいて提案されたもので，「これまでの知識や技能の習得に絞った能力観には限界があり,むしろ学習への意欲や関心から行動に至るまでの広く深い能力観,コンピテンシーに基礎付けられた学習の力への大きな視点」(ライチェン＆サルガニク,2014) が必要になるとしている。このような能力観の変化は，第二言語の習得理論や学習理論のパラダイム転換などと方向性は同じであり，また，日本語教育における学習者の主体性や相互行為，社会的側面を重視する実践理論とも関連している。そこで,本研究では,留学生対象必修科目の教育実践において,3つの「キー･コンピテンシー」,すなわち（1）「相互作用的に道具を用いる」(テキストのみではなく，多角的な情報を得る)（2）「異質な集団で交流する」(地域住民など外部の人が関わる),（3）「自律的に活動する」(ポートフォリオを使って自己の学習を管理，評価する）を取り入れ，発表活動を基本としたプロジェクトベースの実践を行った。その結果，学生が記述したリフレクションのナラティブ分析により，ポートフォリオによって自己の能力に対する内省が促されたこと，また，プロジェクトベースの学習によって，日本語の知識だけでなく,「できた」という自己能力の肯定や「もっとがんばる」という意欲の表出，道具としてのコンピューター・リテラシーの向上など，一定の成果が見られた。今後は継続的な実践により，さらに研究を進めていきたい。

ライチェン，ドミニク＆サルガニク，ローラ編（2014)『キー・コンピテンシー国際標準の学力をめざして』立田慶裕（監訳）明石書店

OECD (2005) THE DEFINITION AND SELECTION OF KEY COMPETENCIES Executive Summary　www.oecd.org/edu/statistics/deseco 2017/08/15